

この5年間、広島県の人口転出超過がたびたび話題となつていゝる。雇用の都市部集中など多くの要因が指摘されるが、私は地域の「かたち」が変わつた影響も小さくないと感じている。

1999年の法改定を契機に進んだ「平成の大合併」で広島県は86市町村から23へと再編され、その減少率は全国1位の優等生とされた。しかし、中山間地域が急速に合併を進める過程



栗崎 真一郎
くりさき しんいちろう

で、吸収する側とされる側、いに学校を手放さず、むしろ生かそうとする地域に出合った。小規模校同士が連携し、体育や音楽など一定の人数が必要な教科を定期的な合同授業で補う。島しよ部では中学校が加わつて中

わば勝ち組と負け組が生まれ結果としてそれまで培われてきた地域固有の文化や生活のリズムが薄れていった。

2005〜12年、広島県を中心に小中学校の統廃合の調査を行った。市町村合併と連動した財政のスリム化のため学校数は減少。県内の公立小学校は15年

までの20年間で約25%減つた。一方で「小さきこと」を理由

に学校を手放さず、むしろ生かそうとする地域に出合った。小規模校同士が連携し、体育や音楽など一定の人数が必要な教科を定期的な合同授業で補う。島しよ部では中学校が加わつて中

学校教員が小学校の授業を支援。複式学級から単式学級への転換を実現した工夫もあつた。

小規模校への地域の積極的な支援や、地域おこしと連動した学習（現在文部科学省が推奨す

る「地域を題材にした学習」に先駆ける取り組み）により、豊かな学びが生み出されていた。

「児童1人当たりの教師数の多さ」や「地域が学校を大切にしている点」から「小さきこと」をむしろ強みとして捉えていたのが印象的である。小規模校が持つ独自の価値は、大きさや効率を重んじる「大国主義」では見落とされがちだが、むしろこの国が進むべき方向を静かに示

しているようにも思える。調査の帰り道、校庭では低学年から高学年まで6人の子どもがフットベースボールをしていて、ランナーが出ると次の打者がいないため、「透明ランナー」という仮想の走者を置き、遊びを続けている。なんと想像力に富み、互いを信頼した遊びだろ

う。ここにも「小さきこと」の工夫と楽しさが息づいていた。

（広島工業大工学部教授）

想